The Japan Society of Educational Sociology

キャンパスライフの研究
－サークル、恋愛、アルバイトを中心に－

○大島真夫（東京大学大学院）
○浜島幸司（上智大学大学院）
○岩田弘三（武蔵野大学）
武内　清（上智大学）

1．問題の所在と本報告の構成

1.1 問題の所在

1990年代以降、FD、カリキュラムの再編、厳格な授業評価の導入、補習教育や初年時教育の実施など、大学の教育面に関する改革が様々な形で行われてきた。これらは、正規のカリキュラムや教授法に関する改革が中心を占めている（天野2002）ことからも分かるように、「放っておけば勉強しない」（天野2001）学生を講義に向かわせるための取り組みであると特徴づけることができよう。それゆえ、大学での教育改革は、成功すればするほど学生が真面目に講義に取り組むようになることが見込まれている。と同時に、多くの場合は、勉強時間が増え、逆に勉強以外に使える時間が減少する。

もちろん、大学教育を行う上で、学生を講義に出席させ勉強させることは、必要なことである。しかしながら、大学の教育機能は、講義を通じてのみ発揮されるものでは必ずしもない。部・サークルに代表される課外活動や、友人・恋人との付き合い、あるいは大学外での活動を通じても、学生の人間的成長がはかられているのかもしれないのである。であるとするならば、改革の成功により勉強時間が増加することで、逆に勉強以外のキャンパスライフにおける学生の成長の機会を失っていることになりはしないだろうか。

これまで、80年代の大学レジャーランド論に代表されるように、学生が勉強しないことは批判の対象だった。そもそも、勉強以外のキャンパスライフで学生はどのように行動し、どのような成長を遂げているのかということについて、実態を明らかにしようとする研究が行われてこなかったのである。そこで、本報告では、キャンパスライフの中でも勉強以外の側面、すなわちサークル、恋愛、アルバイトに焦点を当てて、その実態を明らかにし、学生にとってどのような意味を持っているのかの分析を行うことを試みる。

1.2 本報告の構成

本発表の構成は次の通りである。まず、戦後日本の学生文化がどのように変遷してきたのかを、「遊び文化」と「勉強文化」の2点を対比させながら、その盛衰について歴史的な分析を行う（第2節）。ついで、大学生の遊びの代表例と言われてきた部・サークル活動について、現代の実態の分析を行う。また、大学生の恋愛事情についても分析を行う（第3節）。最後に、これまで勉強を阻害するものとして扱われてきたアルバイトについて、20年前の学生と対比させつつ、キャンパスライフの中での位置づけや動機に変化が生じていることを明らかにする（第4節）。

（大島真夫）

2．日本における学生文化の推移

2.1 学生の生活費支出の動向

文部省の『学生生活調査報告』および全国大学生活共同組合連合会による『学生の消費生活に関する実態調査報告書』（それぞれ、以下、単に『文部省調査』、『生協調査』と呼ぶ）では、大学生活を送るために学生たちが、どのような費目に支出したのかについての調査結果が報告されている。そこでここでは、それを指標にして、学生文化のなかで「勉強文化」と「遊び文化」が、どのような盛衰をみせてきたのかをみていくことにする。なお、今回用いるデータはすべて、昼間部在籍の学生に対するものに限っている。

図2-1は『文部省調査』をもとに、学生の生活費支出のなかでも、「修学費」、「娯楽し好費」、「課外活動費」への出費状況の時系列変化を示したものである。なお、経年比較を可能にするため、各費目の支出額は、現在の貨幣価値に換算してある（図2-3についても同様）。

この図、および図2-3（後掲）でみられる支出動向を要約したものが、表2-1である。なお表では、同じく『文部省調査』から知りえる学生アルバイト文化の変遷（昨年の教育社会学会での報告参照）もあわせて表示してある。

2.1.1 終戦～1950年代前半：生活苦の時代

終戦直後の国民的窮乏のもとで、家庭から

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表2－1. 日本における学生文化の盛衰

		(a)終戦～1950年代前半	(b)1950年代後半～1960年代	(c)1970年代～1980年代前半	(d)1980年代後半～1992年	(e)1993年～現在
		生活苦の時代	「勉強文化」を温存した状態での「遊び文化」台頭期	大学レジャーランド化の時代	遊び文化のバブル時代	長期不況の時代
勉強・教養文化	文具代		→	→	→	→
	書籍代		↗	↘	↘	↘
	修学費	↗	→	↘	↘	↘
遊び文化	娯楽し好費	↗	↗	→	↗	↘
サークル文化	課外活動費		→	↗ (インカレ型多目的サークルの登場)	→	↘
アルバイト文化		パンのためのアルバイトの時代	パンから小遣い稼ぎのためのアルバイトへの転換期	アルバイトの日常化		

の給付（仕送り）も途絶えがちになるなか、ほとんどの学生は、学費はいうにおよばず、何より生きていくのに最低限必要な生活費を稼ぐために、必死の状況におかれた。しかも、戦争によって日本の産業は壊滅的打撃を受け、多くの国民が失業状態を経験し、路頭に迷うなかで、学生たちはそれら学費・生活費を捻出するためのアルバイトをみつけることさえ、なかなかままならないのが実状であった。しかし、その後1950年代中頃までには、緩やかながらも日本経済は終戦の混乱から、少しずつ抜けだしていき、ある程度のお金を学費に回すだけの経済的余裕が出てきた。これは「娯楽し好費」の増加についても、同様に当てはまると考えられる。このように、(a)の時期は、生活逼迫のなか、学生たちにとっては、勉強にも遊びにも精力を割く余裕がなかった、「生活苦の時代」だったとみなせる。

2.1.2 1950年代後半～60年代:「勉強文化」を温存した状態での「遊び文化」浸透の時代

1955年の神武景気を引き金にして、1950年代後半は、1960年に始まる本格的な高度経済成長の到来に向けての先駆けをなす時期であった。1955年頃から、一般家庭における家庭電化製品を中心とした耐久消費財ブームと軌を一にするように、学生のあいだでも、カメラ、トランジスタラジオ、自転車、ギターなどといった耐久消費財ブームが、頭をもたげ始めた。さらに、学生のあいだで「私的自由・安楽への志向」が顕著な傾向になっていくのも、この年あたりからだとされる。

このような状態のなかで、少なくとも生活費支出からみる限り、「勉強文化」は衰退こそしなかったものの、現状維持に留まり、「遊び文化」が急激に膨らみ始めていった。「娯楽し好費」支出が「修学費」支出を上回り、それまでと比べて支出順位の逆転現象がみられるのも、この時期である。

また、図2-2のサークル加入率からみる限り、現在と同じ水準にあるという意味で、遅くとも1966年にはすでにサークル文化は全開状態にあった。例えば1967年に出版された本の中では、「ともかく今日の大学生活は、サークルを除いては考えられない。どこの大学でも、おそらく約九割の学生が、なんらかの意味でサークル活動の経験者である」。さらに昔と異なり、「今日の合宿は運動部の専売特許ではない。運動部、文化部を問わず、サークルはすべて合宿をするといっても過言ではない。‥‥『落語研究会』『唯物論研究会』『シェクスピア研究会』、また各種『合唱団』『古典音楽鑑賞会』等が、なぜ本もなく、音響効果もゼロの田舎で合宿するのか。それでもなお、サークルは合宿にいく」、と証言されている。このように、大学紛争前の1960年代中頃までにサークル、およびそれにつきものの逃せない行事としての合宿が、学生文化の主要なアイテムとして、花開いていたことは明らかである。

2.1.3 1970年代～80年代前半:大学レジャーランド化の時代

この時期、「遊び文化」は飽和点に達し、現状維持をつづけるなか、それまでかろうじて温存状態にあった「勉強文化」が、衰弱を始

NII-Electronic Library Service

める。

2.1.4 1980年代後半～1992年：遊び文化のバブル時代

この時期になっても、「勉強文化」の衰退は止まらなかった。それに対し、「遊び文化」は、いわゆる「バブル経済」に浮かれる世の中を反映して、ますます華美になっていった。

2.1.5 1993年～：長期不況の時代

「バブル経済」がはじけた後の、1993年以降の時期には、「遊び文化」は減退し、「勉強文化」の多少の復権傾向がみられる。また、サークル加入率も大きく減少する（図2-2）。不況の影響で就職が困難になるなかで、少しでも採用条件を有利にするために、よい大学成績を取ろうと、勉強への関心が幾分高まったものと推測される。

（岩田 弘三）

3．部・サークル活動、恋愛

大学生にとって、部・サークル活動、恋愛（男女交際）は、キャンパスライフの重要な要素だ。本節は、これらが大学生に与える影響について、調査データをもとにみていく。なお、図表の出典は「19大学調査」（1997年11～12月）である（詳細は、武内清編 2003『キャンパスライフの今』玉川大学出版部）。

3.1 部・サークル活動

3.1.1 加入者の割合

部・サークル活動について尋ねたところ、何かしらの部活やサークルに「加入している」割合が、約半分（52.9%）。「以前参加していて現在は不参加（途中でやめた）」は、2割弱（18.0%）。「最初から不参加」である人は3割弱（29.1%）である。少なくとも、7割の学生は部活動・サークル活動に参加したことがある。

現在活動中のものに、活動内容について尋ねた。「運動系サークル」（30.8%）と「体育会」（23.5%）をあわせて「運動系」に所属する学生が半数を超える（54.3%）。「文化系」サークル・部が33.5%、「社会活動系」は8.7%である。

3.1.2 属性別の傾向

男女別、大学種別、学年別で、参加の有無をみてみた。男子に「現在活動中」が多く、女子に「最初から不参加」が多い。女子のなかでは、4大女子の方が、短大女子よりも「活動中」が多い。学年では、3年生に「以前参加」のものが多く、1年生に「最初から不参加」が多い。全国大学生協の調査でみても、大学生の部・サークル参加率が年々下がっている。大学生の個人化傾向、集団離れが進んでいるのであろう。

3.1.3 友人関係

部・サークル活動の参加の有無が、大学内での友人関係とどのような関連があるのか。部・サークル活動者は大学内の友人が多い（40.6%）。部・サークルに最初から不参加者は大学以外の友人が多い（32.1%）。「以前参加」者は、その中間である。このように部活・サークル活動をしていると、大学内の友人の数が増える。学内でその活動をする時間が多く、学内で活動を共にする人の数も多くなる。大学内での友人を多く作りたければ、部活動・サークル活動をした方がよいということになる。

3.1.4 部・サークル活動とその生活比重

現在、部やサークルで活動中の学生のうち、その活動の比重が「強い」学生が半数強（53.5%）、「弱い」学生が半数弱（46.5%）である。現在、活動中の者でも、活動を熱心にやる学生とやらない学生がいる。授業の合間に、交友活動の一環として、部・サークル活動を「ほどほど」に活動する学生もいる。

では、どの分野の活動が部・サークル活動の比重の強弱を決定するのであろうか。表に示されているように、体育会に所属すると部活動の比重が強くなる（74.4%）。体育会の学生は、部活動一辺倒になっている様子がうかがえる。体育会と比較すると、いわゆるサークル組織では、活動に打ち込む比重が弱い。文化系の部活動・サークルに属する学生は、体育会と体育会サークルとの中間の比重で、課外活動をしている。

表　活動分野×活動比重

	サークル活動（%）		$p<0.01$
	強く	弱く	合計（N）
体育会	74.4	25.6	254
文化系	52.5	47.5	360
運動系サークル	44.4	55.6	333
社会活動系	41.5	58.5	94
その他	30.6	69.4	36
合計	53.5	46.5	1077

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3.1.5 学生生活の使い分け

部・サークル活動に比重をかけると、その他の活動にどのような影響が出るのだろうか。

差異がみられたのは、「アルバイト」と「異性との交際」である。部・サークル活動に打ち込んでいると、時間に拘束される「アルバイト」はあまりできないことを示している。さらに、部・サークル活動の比重が「強い」学生ほど、「アルバイト」とは反対に、「異性との交際」の比重も高くなる。部・サークル活動が縁で、彼氏／彼女ができて、一緒に活動して、両活動の比重が高まっているものと解釈できる。

3.1.6 自分について

部・サークル活動の比重は、学生個人の内面にどのような差異を生じさせているのか。

部活動・サークル活動への比重が強い学生は、弱い学生よりも、「自由時間がない」と感じている。それだけ活動を熱心に行っているからであろう。活動のために、貴重な時間を投資していると考えることもできれば、活動によって貴重な時間を犠牲にしているとも考えることができる。

一方、部・サークル活動への比重が強い学生は、自分について肯定的になる。つまり、部・サークル活動を重視している学生は、自分には「得意分野」があって、「決めたら最後まで」やりぬいて、なおかつ「自分のことが好き」であると感じている。現在、打ちこむ活動を見つけて、実際に活動することによって、自分を高めることができる。これは部・サークル活動の潜在的効果である。

3.1.7 価値観の変化

部・サークル活動によって、価値観が変わったという学生の声も多い（以下、抜粋）。

「サークルを通して、勉強は、学校だけでするものじゃないこと、様々な人間関係はいろいろな経験を通して学んだ」「サークル内での人間関係などによって自己分析するようになった」「サークル活動で、自分をしっかりもてるようになった」「きっかけは体育会にはいったこと。自我を持たずになんとなく大学に入り、なんとなくサークル活動をし、遊んでいる周りの学生を哀れに思う。またそう思えるほどに充実している」「部活の部長になって、いろんな人と関わるうちに、その人なりの考え方や立場を察せるようになった」「部活動を通して、お世話になった先生、先輩などとのつながりは、社会に出ていく上でも大切にしていかなければならないと感じるようになった」。

3.1.8 部・サークル活動のまとめ

大学は勉強だけをするところではない。部・サークルに所属することによって、学部学科や学年を超えた人間関係が作られていく（それが煩わしくて辞めてしまう場合もあるものの）。部・サークル活動を通じて多くの人々との出会い、活動内容や組織内での役割を通じて、学生は、自己を見つめ直したり、社会生活を考え直したりする。ときには、組織の中で自分が思ってもみなかったような事態に出会うこともある。その困難を解決していくことに、彼ら自身、成長を感じている。部・サークル活動は、学生に楽しみを与える効果だけではなく、社会の一員としての私を自覚させる効果も併せもっている。

3.2 恋愛（男女交際）

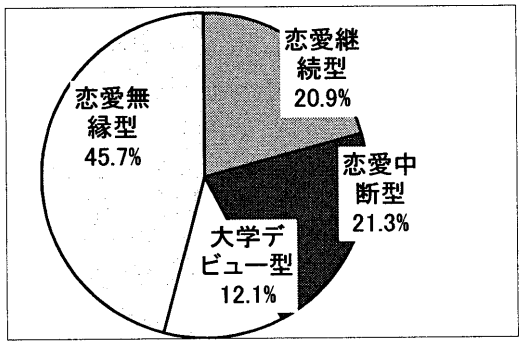
3.2.1 恋愛経験とその類型

高校時代あまり交際・恋愛経験をしなかった学生は、交際・恋愛で「大学デビュー」したいと考える。しかし「大学デビュー」はなかなか難しい。恋愛には、大学に入るまでの助走期間が大事である。

表と図

高校異性交際×大学異性交際比重

		大学異性との交際比重		
		強く	弱く	N(100.0)
高校交際	した	49.5	50.5	865
	しなかった	21.0	79.0	1187
p<0.01	合計	33.0	67.0	2052



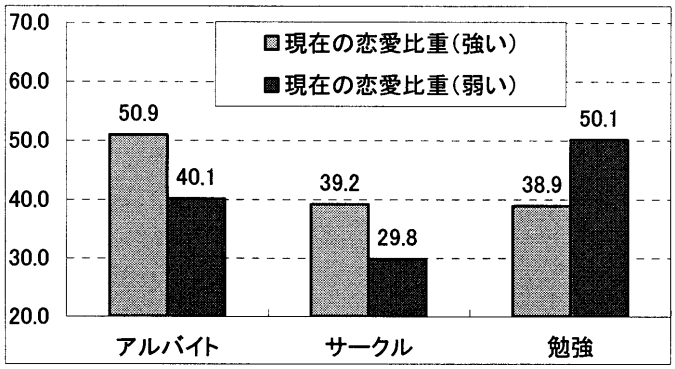
NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3.2.2 恋愛経験と学生生活

大学における交際・恋愛経験は、大学生活のさまざまな面を豊かにする。自分への評価を高め、社会性も身につく。とりわけ女子学生の場合、恋愛経験により価値観が大きく変わる。部・サークル活動やアルバイトの面でも、交際・恋愛中の学生が活躍する。しかし勉強面はおろそかになる。

表　学生生活の比重（強い）×恋愛比重（%）



すべて　p<0.01

大学時代は、恋愛をして人間的深化をはかるのも一つの選択であり、恋愛より勉強を優先し、目標達成を目ざすのも一つの選択の道である。どちらの選択も許されるのが大学である。　（浜島幸司）

4．アルバイト

4.1. 生活の比重のシフト：部・サークルからアルバイトへ

「19大学調査」によれば、アルバイトを1度でも経験したことがある学生は9割を越えた。キャンパスライフの中にアルバイトは広く浸透している。学生たちはアルバイトにどのくらいの比重を置いているのだろうか。

図4-1は、「アルバイト」「勉強」「部活・サークル活動」のどれに比重を置いているかによって学生を8つのタイプに分け、それぞれのタイプごとに、全体に占める割合を示したものである（「19大学調査」・「卒業生調査」）。

これによれば、現代の大学生は勉強とアルバイトを重視する一方で、サークルはあまり重視していない。「勉強重視」「勉強とバイトを重視」「バイトを重視」が1位から3位を占めていて、これらの割合を合計すると5割を超えるのに対し、サークルを重視している学生は相対的に見ると少数派にとどまっている。

こうした傾向は、卒業生の状況と比較するとより明確である。この20年間でサークルに比重を置いている学生が減少して、アルバイトに比重を置いている学生が増加した。80年卒と現代の学生とでは、サークルとアルバイトの位置関係がちょうど逆転してしまったように見える。全体的な傾向として、学生の部・サークル離れがすすみアルバイト重視の傾向が強まっていることがここから読みとれる。

4.2.アルバイトをする動機の変化

4.2.1 収入源として

学生がアルバイトをする最大の理由は収入を得るためである。学生援護会の調査や日本私立大学連盟の調査 を見ても、「ほしい物を購入したり、やりたいことをするため」や「外食・普段の小遣のため」が1位になっている。学生の生活費を調べた文部科学省の調査 によれば、自宅外の「下宿・間借、その他」で暮らしている学生は年間収入が約255万円、そのうち一割強の33万円あまりをアルバイトからの収入に頼っている。これが自宅生では約180万円の収入に対し43万円強となり、アルバイトに頼る割合は2割強にも達する。また、「19大学調査」からも、アルバイトをすれば「自分で自由に使えるお金」が増えるという関係も確認できた。

4.2.2 社会勉強として

近年増えているのが、社会体験を目的とするアルバイトである。収入を得ることに次いで多くあげられるようになった。日本私立大学連盟の調査でもアルバイトをする理由の第2位は「社会勉強のため」であるし、高木（2000）らが行った調査でも第3位に「社会経験をするため」があげられていた。

では、なぜこのような変化が生じたのか。高木（前掲）はその理由を大学の大衆化と大卒労働市場の変化に求めている。しかしながら、別の理由も考えられよう。就職試験対策という理由である。

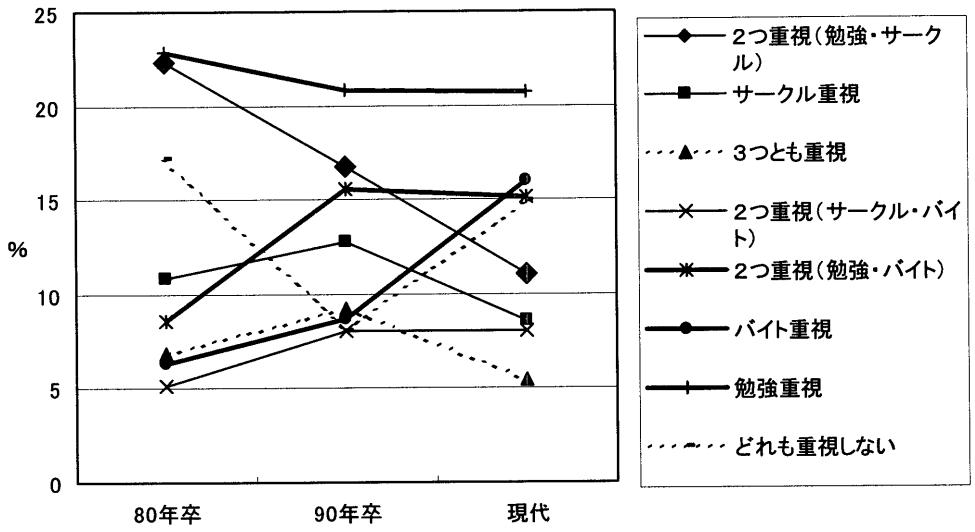
学生援護会の調査によれば、「社会勉強のため」の割合は95年までは40%台前半だったのが、90年代後半から50%を超えるようになった。変化の転換点は90年代後半に存在する。この現象を説明するには高木の指摘する2点の理由だけでは不十分である。労働市場の変化と学生の意識の変化との間にタイムラグがありすぎる。

もしアルバイトと卒業後の職業の関連性を学生が意識しているというのが正しいのであれば、90年代に起こった変化は、93年以降にすすんだ大卒就職率の大幅減少と重ね合わせて理解する方がより適切だろう。90年代以

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

図4-1 比重を置いている活動



降の就職の場面では、筆記試験の重要性が相対的に減少し、エントリーシートの導入や面接重視の方向へと採用選考方法が急激に変化していく中で、大学時代の体験がますます問われるようになってきた。こうした変化を学生達が敏感に感じ取り、就職難の中で他人より少しでも有利になるために、大学時代の体験を一つ増やす手段としてアルバイトを位置づけるようになった、と解釈できる。

4.3.アルバイト＝社会勉強の内実

4.3.1 就業体験としてのインパクト

労働市場の変化をきっかけに、学生がアルバイトの目的を社会体験や社会勉強に据えるようになったとしても、アルバイトを通じて実際に何を体験できるかはまた別の次元の問題である。学生の目的どおり結果がついてくるとは限らない。

アルバイトを社会体験や社会勉強と位置づける学生が増えている中で、学生達はアルバイトから何を感じ取っているのだろうか。ここでは、アルバイトを体験するとどのような価値観の変化を経験するのかについて、「19大学調査」の自由記述の回答をもとにまとめた。回答は6点に分類することができた。この回答を見てわかるのは「働くことの意味を知った」という学生は少数だということである。アルバイトの持つ就業体験としてのインパクトは小さいと言える。大半の学生にとっては、アルバイトを通じて人間関係一般のことや社会・価値観について考えたり、あるいは自分自身のことについて見直すきっかけにしたりすることはあっても、働くことの意味まで考えるには至らないのである。

4.3.2 アルバイトの現代的意味

では、学生達がアルバイトを通じて「価値観の多様性」や「人間関係」などを学ぶことにはどのような意味があるのだろうか。

岩田(1984)は、大学レジャーランド論が幅を利かせていた時代に、サークルは学びの場にもなっていることを指摘し、学生への聞き取りに基づいて学生達がサークル活動から何を学んでいるかを10項目にまとめている 。その中には「人間関係のむずかしさ、表と裏を知った。礼儀を学んだ。」「忍耐と協調。」「多様な経験をした。異質な世界を知った。視野が広がった。深く考えるようになった。」というものが含まれている。

実はこれらは、現代の大学生がアルバイトを通じて学んでいると思っているものと同じである。かつてサークルを通じて体験したものを、現在はアルバイトを通じて体験するようになっているのである。

80年代と現代、アルバイトとサークル、というように、時間的・空間的な違いを超えてもなお、大学生が同じように「価値観の多様性」や「人間関係」などを指摘するということは注目に値する。これらのことを考えたり学んだりすることは、大学生に共通の、いわば普遍的な体験なのかもしれない。学生ならばたいていの人が関心を示す、いわば大学生の文化のようなもの、といってもよいだろう。アルバイトの作業が定型的で、関心が仕事からずれていこうとしたときに、向かう先がこのような大学生の文化なのである。

(大島真夫)

NII-Electronic Library Service